

2026年 知財AIの二大潮流：「閉じる」ローカルLLMと「開く」MCP連携



【閉じる】上流工程を支えるローカルLLM

- 未公開の「発明情報」を扱う上流工程に集中
明細書作成や発明届出支援など、機密性が最優先される業務で「完全オフライン」が必須に。



- 多様な「ローカル」の形態
CPUのみで動くPCから、国内ソプリンGPUクラウド、独自特許モデルまで多層化。



● 主なプレイヤーとアプローチ

 Trans N



トランスエス（ハード統合型）、
推荐されるアプローチ

 Ivy Research



アイビーリサーチ（CPU駆動）、
Patentfield（独習モデル）。

 Patentfield



カスタム AIモデル

業務工程	主な情報種別	推奨環境
発明発掘・明細書作成	未公開（機密）	ローカルLLM / オンプレミス 
特許調査・分析	公開公報（既知）	汎用LLM + MCP連携 
翻訳・管理	混合	閉域クラウド / 専用環境 



【開く】下流工程を加速するMCP連携

- 「公開情報」の調査・分析を効率化
特許調査や文献読解など、公開データを汎用LLM（Claude等）から直接呼び出す形式が流行。



- MCP (Model Context Protocol) の普及
外部AIと特許DBを安全に繋ぐ標準規格として、サマリアやAI Samurai等が相次ぎ対応。



- 利便性とセキュリティのトレードオフ

接続による利便性が高まる一方、外部APIへのデータ送信に関する社内規定定の整備が急務に。

